

なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか

著者	森田 美千代
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	No.45
ページ	73-89
発行年	2009-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00001212/

Title	なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか
Author(s)	森田, 美千代
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 45
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2020
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか

森田 美千代

I. はじめに

筆者に与えられている課題は、「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」である。これはとても難しい課題である。キリスト教教育は、そもそも必要であると言えるのか、言えないのか。もし必要であると言えるのであれば、なぜなのか。そして、ほかでもない、なぜ日本に必要なのか。「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」の課題は、それらのことを解明しなければならない課題だからである。

課題に取り組むにあたって、その前提として、次のことを共有しておきたい。大木英夫は、一九八〇年代に、日本の神学界やキリスト教教育界に向かつて、次のようなエポック・メイキングなテーゼの提言をおこなった。それは、衝撃的なテーゼであった。例えば、『日本の神学』⁽¹⁾では、日本をトータルかつラディカルに対象化できるように私たち日本人はならなければならないと述べている。一九八三年の「教育の神学」という講演においては、「教育そのものを神学的にどう考えるかという仕方ですえ直し、そこから見直していかなければならない」と言っている⁽²⁾。一九八六年の「日本にお

けるキリスト教教育の課題」という講演においては、次のように述べている。「わたしは、キリスト教教育が日本においてどういう使命を持つかということを考えた場合に、日本を、トータル、ラディカルに、捉えるということにおいて考えねばならないと思うのであります。キリスト教教育のみならず、わたしは、教育というものは、そういうものでなければならぬと考えておるのであります⁽³⁾」。つまり、私たちは、日本をトータルかつラディカルに捉えるということにおいて、なぜ日本にキリスト教教育が必要なのかと、問わねばならないのである。本稿においては、そのことをたえず基調音として自覚していきたい。

II. これまでの日本をどう捉えるか

したがって、「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」を解明するにあたって、これまでの日本をどう捉えるか、から始めるのがふさわしいだろう。これまでの日本は、キリスト教やキリスト教教育にとって、どのようなものであっただろうか。近藤勝彦は、これまでの日本を次のように捉えている⁽⁴⁾。その捉え方には説得力があるように思える。第一に、日本社会は、キリスト教が伝道される以前にすでに他の宗教の定着があつて、それら他の宗教が、キリスト教伝来に際して、社会を宗教的に組織化するのに用いられた⁽⁵⁾。例えば、家族は、家のなかの仏壇の存在や檀家制度の残存によつて仏教的に組織され、地域社会は神社によつて氏神・氏子として神道的に組織され、公共社会も習俗だからという理由によつて神道によつて組織された⁽⁶⁾。第二に、日本社会は、反キリスト教的性格を根強く持っていたし、今も持つているといえる。国家神道、神社神道と融合した仏教、日本的な多神教、アニミズムの宗教、祖先崇拜などでわかるように、日本社会は超越的な神の観念を持たず、反キリスト教的性格を示しているという⁽⁷⁾。第三に、一九世紀から二〇世紀

にかけて、既成宗教の中から現世的価値や利益を強調して、民衆の心をつかむ新興宗教の運動と組織化が行なわれた。例えば、「天理教」、「生長の家」、「立正佼成会」、「創価学会」などである。これらの新興宗教に比べて、キリスト教は民衆を獲得するということにおいて明らかに遅れをとった。⁽⁸⁾ 第四に、現在、教育の危機が叫ばれ、教育の精神的支柱の強化が図られている。例えば、すでに「教育基本法」が改正され、「日の丸」掲揚や「君が代」斉唱が法によって規制されている。そしてその中身は「古いナショナリズム」であるという。⁽⁹⁾ 第五に、一九六〇年代の高度経済成長以後、人々の関心が一層世俗化し、現世化したことが挙げられるという。人間を垂直に向かう円錐に例えるならば、その円錐の尖塔が切除され、鈍磨されている状態である。切除された部分は、せいぜいカウンセリングでこと足りると思われる。⁽¹⁰⁾ そしてそのカウンセリングは、往々にして、人間を垂直次元に目覚めさせるのではなく、人間をますます「内向き」にするように機能していると言えるように筆者は思っている。大木も、「日本のキリスト教はセンチメンタルなキリスト教で、心の内面の宗教であり、(中略)これでは困るのです」と言う。⁽¹¹⁾

ちなみに、聖書のみことばとの関連で言えば、これまでの日本社会は、キリスト教やキリスト教教育にとってどうであつたといえるだろうか。それは「種蒔きのたとえ話」を想起させるものではないだろうか。日本社会は、「道ばた」であり、「土の薄い石地」であり、「いばらの地」であり、「良い地」であることは稀であつた。つまり、「自分の考えや経験を絶対化して」キリスト教を受け入れようとしないうちに、キリスト教をすぐに受け入れるが「困難や迫害が起こってくる」とまたすぐに捨ててしまう土壌であり、「世の心づかいと富の惑わし」のような世俗的なものでふさがれてしまう土壌ではなかつたか。⁽¹²⁾

III. 日本国民のせめて一〇パーセントがキリスト者でなければならない

II. においてみてきたように、日本社会とキリスト教との出会いとその後の歴史は、親和的なものではなかった。その結果、ここながらくの間、キリスト者の人口は一パーセント前後の低迷状態を続けている。

日本国民のせめて一〇パーセントがキリスト者でなければならない、とは古屋英雄の持論である。今から三〇年程前にすでに、古屋は、「私はかねがね、一国あるいは一社会の少なくとも一〇パーセントが、メンバーにならないければ、ある宗教や人種が有効な影響力を行使することはできない」と述べている。⁽¹³⁾『日本の神学』では、次のように述べている。「これまでのように国民人口の僅か一パーセントのキリスト者人口のままでは、国民の意志と心理に影響力をおよぼすことは不可能に近い。わたしはかねてより、宗教社会学的にいつても、一つの国の人口の少なくとも一〇パーセントにならないければ、一つの宗教がその国の動向を左右する政治社会的勢力にはなり得ない、それゆえに、日本国民の一〇パーセントをキリスト者にしなければならないと主張してきた」。⁽¹⁴⁾

古屋の持論と同じ内容のことを、それとは異なる表現で、近藤は「日本社会におけるキリスト教のプレゼンス」として言い表している。⁽¹⁵⁾近藤は、日本社会におけるキリスト教のプレゼンスが弱いことを心配する。「一般的な社会的空間におけるキリスト教のプレゼンスを顕在化させる努力がなされなければならない。(中略)キリスト教の一種の埋没現象が見られる。社会の中の創造的な勢力として、あるいは先見的な勢力として、その新鮮な力を示すことができていない。注目に値する社会的な力として自己を提示し、証明することができていない」と指摘する。⁽¹⁶⁾

古屋が述べることも、近藤が述べることも、まったくその通りであると言わざるをえない。キリスト者人口が日本国

民の人口のパーセントしか占めないようでは、キリスト教は日本社会においてプレゼントできない。ましてや、キリスト教が日本社会を変革することは難しい。それではどうしたらいいのだろうか。教会自体の活性化によらねばならないことは根本的なことであるが、キリスト教教育の活性化によることも大きいということは確かであろう。

近藤は、次のように考えている。「キリスト教の社会的なプレゼンスは何よりもまず『教会』として示されるべきである。しかしキリスト教の社会的なプレゼンスは教会だけに限定されるわけではない。キリスト教学校があり、キリスト教出版活動があり、キリスト教医療団体や福祉団体の活動もあり、NPO、NGOの活動もあり得るからである」⁽¹⁷⁾。キリスト教のプレゼンスにはいくつかの方法や手段があることを知りつつも、ここでは特に、キリスト教教育は何をしなければならないか、キリスト教教育は何ができるだろうかを、考えることにしたい。危機はチャンスでもある。

IV. キリスト教教育は何をしなければならないか、あるいは何ができるか

まず次のことを確認しておきたい。小倉義明は述べている。「教育と伝道の不可分離性である。(中略)福音の伝道なくして真実の教育は実現され得ないとわれわれは考える」⁽¹⁸⁾。つまり、キリスト教教育と伝道は、車の両輪である。したがって、本稿においては、特にこれ以後の本稿においては、キリスト教教育と伝道が、表裏一体のことと内容として使用されることがあるということを、ことわっておきたい。

そのことを共有したうえで、それでは、キリスト教教育は、どうしたらよいのだろうか。それは、家庭とキリスト教学校と教会が、なすべきである。家庭かキリスト教学校か教会かと問うべきではなく、家庭もキリスト教学校も教会

も、手を携えて協力すべきである。しかし、そのなかで、教会が最も根本であると見なすのは、理にかなっているように思える。キリスト教的には、教会から、家庭もキリスト教学校も誕生しているものだからである。

1. 教会がしなければならぬ(できる)キリスト教教育(と伝道)

「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」という、キリスト教教育に関する講演の依頼を受けたので、この機会にブッシュネルの『キリスト教養育』を紹介することが、翻訳者である筆者の責任であるとともに特権であると感じている。とはいっても、ブッシュネルは、キリスト教教育がおこなわれる場としては、教会と家庭しか考えておらず、キリスト教学校のことはほとんど論じていないので、ブッシュネルの『キリスト教養育』と対話しつつ、ブッシュネルについて考察できるのは、前二者の教会と家庭に關してだけである。

ブッシュネルのキリスト教教育についてのテーゼは、よく知られているように、「子どもは、クリスチャンとして成長すべきであり、決してクリスチャン以外の者として自らを知るべきではない」ということである。⁽¹⁹⁾ このことを確実なものにする決定的な第一歩は、幼児洗礼であると言えるであろう。事実、ブッシュネルも、自分が提唱しているキリスト教教育は、幼児洗礼を認めることと切り離せないと言っている。⁽²⁰⁾ (さらにいえば、ブッシュネルは、自分が擁護しようとしているキリスト教教育と幼児洗礼は、一九世紀の新しい考えではなく、キリスト教会の始まりと同じ位古いものであると言っている。⁽²¹⁾)

それでは、ブッシュネルは、幼児洗礼についてどのように言っているか。「幼児洗礼あるいは全家洗礼とは、親の信仰のしるし(a seal of faith in the parent)であり、子どもの信仰は親の信仰に包まれているという推定を根拠として、子どもに適用されたものである。したがって、子どもは、最初から信仰者(believer)とみなされる」と、ブッシュネ

ルは言っている⁽²²⁾。ここで大事なことは、ブッシュネルが考える幼児洗礼の根拠は、子ども自身の信仰にあるのではなくて、親の信仰にあること、そしてその親の信仰に子どもの信仰も含まれているということである。

次に注意を喚起されるべきことは、ブッシュネルは、キリストが語られたことばである、「幼な子らをわたしのところに来るままにしておきなさい。止めてはならない。天国はこのような者の国である」⁽²³⁾を基にして、幼児洗礼を支持していることである。

以上ですでにわかるように、ブッシュネルは幼児洗礼の擁護者であり、筆者も幼児洗礼に賛成する者である。幼児洗礼をぬきにして、人はどのようにしてクリスチャンとして、成長し始めることができるのだろうか。洗礼は大人になつてからであるべきことつまり成人洗礼であるべきことや、洗礼には洗礼を受ける者の自覚的意識が必要であるべきであるということでは、その基準をクリアできるまでの間の子どもは、放っておかれてもいいというのであろうか。断じてそうではない。大事なことは、近藤も言っているように、まず洗礼によって「キリストのもの」とされることである。そこから、キリスト教教育のすべてが始まるのである。

次のこともブッシュネルの『キリスト教養育』から筆者が学んだことであるが、日本の教会は、ブッシュネルが強調するごとく、子どもなる存在にもっと自覚して着目しなければならないのではないだろうか。日本の教会は、大人や青年にこれまで着目したが、それは事実上失敗した。今や、日本の教会は、青年より前の時期の、子どもに目を向ける時ではないか。

ここで、興味深いことは、日本においては誤解されていると筆者には思えるのであるが、ブッシュネルは、幼児洗礼後の子どもの教育として、現在おこなわれているような教会学校を必ずしもイメージしてはいなかったことである。日曜学校についての言及はわずかながあるが、それは現在のような教会学校に繋がるものではなく、捨て子や孤児などを教会が保護や養育することを指していた。ブッシュネルは、幼児洗礼を受けた子どもは、両親と一緒に教会で礼拝を

まもることをイメージしていたように、『キリスト教養育』を注意深く読んだ筆者には思えるのである。したがって、ブッシュネルとともに筆者は、子どもたちを排除した礼拝から、子どもたちとともにささげる礼拝（子どもたちを中心とした礼拝という意味ではない）へと、日本の教会における礼拝が変わっていくことを、提案したい。

筆者が属している教会では残念ながら行なわれていないが、上述のような、「子どもたちとともにささげる礼拝」が実際に行なわれている教会もある。田中かおるは、自ら牧する教会の礼拝を次のように記している。

安行教会では、礼拝は子どもから成人まで一緒に献げています。それは、教会学校がふるわないから窮地の策でそうした、というのではありません。神の民は、本来、礼拝共同体であり、この共同体は次世代に信仰を継承していくことをそもそも使命としていた、ということを研修会などで確認しました。それで、生まれ tabかりの赤ちゃんから成人まで、一緒に神さまの前に跪き、礼拝を献げることこそ、礼拝共同体の本来の姿、という観点から、こういう形にしました。礼拝開始から終了まで、基本は一緒です。子ども賛美歌、子どもメッセージの後、成人のメッセージの時だけは、隣室で静かに過ごしてもよいことになっています。保護者と一緒に過ごせる人は、そのまま礼拝堂にいても構わない、という申し合わせです。（中略）礼拝をこの形にして、今年のクリスマスで九年目です。この礼拝から信仰告白者が生まれました。⁽²⁴⁾

以上のように、子どもとともにささげる礼拝とブッシュネルが支持する幼児洗礼は、少なくとも、日本のキリスト教の現状を突破していく大事な出発点になるのではないかと筆者には思える。

2. 家庭がなければならない(できる)キリスト教教育(と伝道)

ブッシュネルは、家庭を、「小さな教会 (little church)」であると見なしている⁽²⁵⁾。この着眼は重要ではあるまいか。日本人には——クリスチャンであつても——家庭をこのように見なす視点がないのではないだろうか。ブッシュネルが、いかに家庭を教会と相即不離の関係にあるとみなしていたかがよくわかる。また、ブッシュネルが、宗教(この場合はキリスト教)を家庭の聖なる構成要素 (the sacred element of home) であると指摘していることも、見逃されてはならない⁽²⁶⁾。

日本国民のせめて一〇パーセントがキリスト者であるために、家庭がなし得るキリスト教教育は大きいと考えるのは、筆者のみではない。ブッシュネルは、クリスチャン人口をもつと増やさなければならぬし、もつと増やしようはずであるという。そのためには、家族伝播 (family propagation) の方法、つまり、教会員の子どもたちが家庭でクリスチャンとして教育されることによると言っている。このようにして、ブッシュネルによれば、この世がクリスチャンの優勢で満たされていくことになる⁽²⁷⁾。さらに、そのことが、親と子のその一代だけで終わるのではなくて、連続していく諸世代にも引き続き起きるように、ブッシュネルは願っている。子ども、そして、その子どもの子どもたちのキリスト教信仰が生得的 (inbred) にならなければならない、いや生得的になりうるはずであると、ブッシュネルは言っている。つまり、信仰の継承がなされなければならないし、なされうるはずであると、彼は考えている⁽²⁸⁾。要するに、子どもたちが家庭でクリスチャンとして教育されることによつて家庭にキリスト教が伝播し、そしてそれが連続していく世代に継承されていかねばならないし、継承されていくことができる、ブッシュネルは言っているのである。

ブッシュネルと同様のことを、現代において、近藤は、「子どもたちに信仰を伝えることは、言語(母国語)を伝え

ることとともに、あるいは人としての基本的な生き方を教え、人としてのモラルや道徳を教えることとともに、家族における教育の中核になればならない重大な責任です」⁽²⁹⁾と述べている。つまり、家庭がしなければならない教育の中心は、信仰教育である。古屋も、次のように言っている。「わたしが強調したいのは、家庭におけるキリスト教教育、つまり親子両方の教育にかかわるキリスト教教育であります。どうしたら父親と母親は、良いキリスト者の両親となるか、どのように教育したら、その子どもたちは信仰を継承し、キリスト者となるであろうか。家庭におけるキリスト教教育とは、まず何よりも親の信仰教育にほかなりません。信仰をもった親の適正なる教育があつて、はじめて子どもたちは信仰へと導かれ、キリスト者となるのです」⁽³⁰⁾。さらに続けて言う。「もし現在わが国民人口の一パーセントであるわたしたちキリスト者がみな、クリスチャン・ホームを形成し、その子どもたちがみなキリスト者として成長したならば、そしてその子どもたちがさらにクリスチャン・ホームをつくるならば、数世代のうちにキリスト者人口は必ずや一〇パーセントになるであらうでしょう」⁽³¹⁾。つまり、クリスチャン・ホームが形成され、その家庭においてキリスト教（信仰）教育がなされ、家族伝道がなされ、信仰の継承がなされるならば、数世代にしてキリスト者人口は一〇パーセントになるはずであるということである。

ブッシュネルは一九世紀のアメリカにおいて、古屋と近藤は現代の日本において発言しているのであるが、主張していることは同じではあるまいか。つまり、家庭がしなければならない教育は、キリスト教教育（信仰教育）であり、家庭の子どもたちへの伝播（伝道）であり、信仰の継承である。

ブッシュネルは、上述に加えてさらに、家庭における祈りの重要性について、述べている。祈りというものは、神の思いと一致していなければならない、また独りよがりでは他の人の祈りと調和しないものであつてはならないのと同じように、家庭の祈りも、神の意志と調和してはならず、家庭における各人の祈りは家族全員の祈りでなければならない、とブッシュネルは言っている⁽³²⁾。家庭での祈りについてブッシュネルが開陳していることは、現代の我々を目覚

めさせるものではないだろうか。神の意志と一致している祈り、他の人と共有できる祈りができるような祈りの生活を家庭でしなければ、前述したキリスト教教育（信仰教育）、家庭の子どもたちへの伝播（伝道）、信仰の継承も、ほんとうのところは実現できないといえよう。

3. キリスト教学校がしなければならない（できる）キリスト教教育（と伝道）

前述したように、ブッシュネルはキリスト教学校についてはほとんど論じていないので、キリスト教学校がしなければならない（できる）キリスト教教育（と伝道）について、ブッシュネルと対話しつつ学ぶことはできない。

実は、キリスト教学校がしなければならない（できる）キリスト教教育（と伝道）は、日本に独自であるのかもしれないと筆者は考えている。換言すれば、キリスト教学校におけるキリスト教教育の貢献は、日本独自のものであり、それは日本におけるキリスト教の伝播（伝道）においてまことに大きいものがあり、少なくともアメリカにおける比ではなかったのではないかと感じている。⁽³³⁾

それは、日本におけるプロテスタント・キリスト教が、アメリカ宣教師たちによってもたらされたものであり、彼らアメリカ宣教師たちが着眼したものは、教会の設立であるとともにキリスト教学校（特に女子のミッション・スクール）の設立であったからである。斉藤正彦は、次のように述べている。歴史的に言えば、「大多数のキリスト教学校は、いわゆるミッション・スクールとして、海外の教会が、そのミッションボードを通して、創設し、経営し、指導してきたのである。（中略）それに対して、日本の教会との関係は希薄であり、日本の教会がキリスト教学校に対して、強い責任を感じることはほとんどなかったと言つてよい。したがって、キリスト教学校は歴史的には日本の教会を母体として誕生したものではなく、むしろ海外の教会を母体として日本の教会と共に生きたいわば双生児としてとらえるほうが

よいように思われる」⁽³⁴⁾。ここに、日本のキリスト教学校におけるキリスト教教育の正と負の両方における特徴があるといえよう。

日本のキリスト教学校におけるキリスト教教育の正の意味での特徴は、最初期の宣教師たちが質の高い教育を施してくれたことにより、当時の日本の教育をリードし、日本の教育全体のレベルを上げてくれたことである。しかし、負の特徴も同時にもつていたといわざるをえない。それは、前述の引用でも明らかのように、日本のミッシオン・スクールの成立の経緯から、教会がキリスト教学校を生み出しそれに責任的に関わらねばならないという自覚を教会人にもたせなくしてしまい、またキリスト教学校もそれ自体で自己充足し、教会との関わりをそれほど求めなかったという点である。

歴史的にはそれが事実であつたにしても、本来的には教会がキリスト教学校を生み出し、生み出されたキリスト教学校は教会と深く結びついていなければならない。キリスト教学校の教育は、教会と結びついていなければ、その使命や目的を達成することは不可能である。そのためには、具体的にキリスト教学校が学生や生徒を教会に導き、他方教会は、教会に導かれた学生や生徒を訓練して信仰に導き、そこでクリスチャンとなつたよき教育者や研究者をキリスト教学校に送り出すというような双方向の関係が樹立されることが大事なこととなろう。⁽³⁵⁾ 要約すれば、キリスト教学校は、キリストの体なる教会を基盤として、その働きの一端を担う肢体として建てられているのであり、したがってキリスト教学校は、教会とのあいだに深くて良き関係を保つことなしには、その使命や目的を果たすことはできないのである。⁽³⁶⁾

しかし実際には、キリスト教学校は、最近キリスト教の力の不足に悩んでおり（具体的には実質を伴ったキリスト者の教員数が絶対的に不足しており）、⁽³⁷⁾ こういう状態は、日本の教会が伝道すべき重大な基盤の一角を失いつつあることを示している、と近藤は言う。これはまた、翻つて日本の教会を弱体化させている大きな原因の一つでもある。

これまでキリスト教学校と教会との繋がり的重要性について述べてきたが、キリスト教学校としてしなければならぬ(できる)キリスト教教育の中心は、学校礼拝であることが強調されねばならない。学校礼拝がないキリスト教学校は存在しない。学校礼拝では、もちろん教会礼拝と違って、洗礼と聖餐がおこなわれることはないが、そこでは聖書が読まれ、みことばの説き明かしがなされ、祈りがなされることが出来る。そのような礼拝を持続して行なうことがキリスト教学校であることなのであり、そしてそのような礼拝をささげ続けることが、学生や生徒に対する着実な伝道となることは確かなことである。

V. おわりに

日本社会とキリスト教との出会いとその後の歴史は、II. においてみたように、親和的なものではなかった。その結果が、キリスト者の人口が一パーセント前後という低迷状態を続けることになっているのである。

しかし、現代および将来の日本社会は、キリスト教教育(や伝道)にとつて好ましい兆しがなきにしもあらずと、近藤は指摘する。その第一点、世界において国際化、グローバル化が進んでいることであるという。国際化、グローバル化が世界において進行している限り、日本社会は、キリスト教教育(や伝道)に自由な活動の場と機会を与えないわけにはいかないという⁽³⁸⁾。第二点は、現代は技術社会であるが、その発達そのものは、人間の生と死の意味を示したり、人間の生と死の問題を解決したりすることはできない。キリスト教教育(や伝道)こそ、そのようなことについて明確に答えうる好機と責任が与えられているといえる。そのチャンスと責任を活かさねばならない⁽³⁹⁾。第三点は、社会の流動化や人口移動の激化によって、古い社会の宗教的組織化の体制が崩れかけている事実があるという。それは逆に、キ

スト教教育（や伝道）にとって好機であるといえる。⁽⁴¹⁾

以上のような追い風を活用して、日本国民のせめて一〇パーセントをキリスト者にしなければならない。そうでなければ、キリスト教がもつ先見的な力、創造的力などの良きそして価値ある力を用いて日本社会を変革していくことはできない。

日本国民のせめて一〇パーセントをキリスト者にするために、キリスト教教育が必要不可欠なものとして用いられた。教会がしなければならぬ（できる）キリスト教教育の第一歩は、幼児洗礼でなければならないと、筆者は考える。また、子どもたちを排除した礼拝から、子どもたちとともにささげる礼拝へと、日本の教会における礼拝が変わっていくことを提案したい。

家庭がしなければならない（できる）教育は、キリスト教教育（信仰教育）であり、家庭の子どもたちへの伝播（伝道）であり、信仰の継承である。また、祈る生活が家庭でなされなければならない。

キリスト教学校が考えておかねばならないことは、そのキリスト教教育は決してキリスト教学校だけで完結するものではなく、教会としつかり結びついていなくてはならないことである。さらに、キリスト教学校がしなければならないキリスト教教育の中心は、学校礼拝である。学校礼拝がないキリスト教学校はキリスト教学校であるとは言えない。

実際には、以上の教会と家庭とキリスト教学校が、別々にキリスト教教育をおこなうことは不可能である。キリスト教教育は、教会も家庭もキリスト教学校も手を携えながら協力して行なわなければ、進んでいかなないことは言うまでもない。

以上が、「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」の課題に対する筆者の応答である。

本稿は、「聖学院大学総合研究所組織神学研究センター連続講座『なぜ日本に神学が必要なのか』」における講演「なぜ日本にキリスト教教育が必要なのか」(二〇〇八年一月二五日)に、修正を加えたものである。

なお、聖学院大学総合研究所から二〇〇九年三月一五日に発行された『聖学院大学総合研究所 Newsletter』の Vol. 18-4, 2008 において、張田仰氏が、右記講演の的確な概要をしているので、それも併せて参照してほしい。

注

- (1) 古屋安雄・大木英夫『日本の神学』ヨルダン社、一九八九年、一一頁、二二九頁、その他。
- (2) 大木英夫「教育の神学」『教育の神学』学校伝道会編、ヨルダン社、一九八七年、一七頁。
- (3) 大木英夫「日本におけるキリスト教教育の課題」『宇魂和才』の説——二二世紀の教育理念——聖学院大学出版会、一九九八年、二〇二—二〇三頁。
- (4) 正確に言えば近藤は、以下の五点を、なぜ日本社会はキリスト教伝道が困難であるかの理由として挙げている。本稿では、それを、これまでの日本をどう捉えるかということに転用させていただいた。なお、アイデアと表現のしかたは近藤にその大部分を負っているが、まったくの引用でもない。部分的に筆者自身の表現が混じっている。そのことを、最初にごわっておきたい。
- (5) 近藤勝彦『キリスト教の世界政策——現代文明におけるキリスト教の責任と役割』教文館、二〇〇七年、二二六頁。
- (6) 同書、二三〇—二三二頁。
- (7) 同書、二二六頁。

- (8) 同書、二三七頁。
- (9) 同書、二三八頁。
- (10) 同書、二三八―二三九頁。
- (11) 大木英夫「キリスト教学校の現代的意味」『キリスト教学校の再建』学校伝道研究会編、聖学院大学出版会、一九九七年、三五頁。大木、『宇魂和才』の説——二一世紀の教育理念、一二六〇頁。
- (12) 『マタイによる福音書』の第三章一節から二三節、『マルコによる福音書』の第四章一節から二〇節、『ルカによる福音書』の第八章の四節から一五節を参照。一九五五年に出版された日本基督教団出版局の『新約聖書略解』も参照。
- (13) 古屋安雄『現代キリスト教と将来』新地書房、一九八四年、一八九頁。
- (14) 古屋・大木、前掲書、二一五頁。古屋安雄『日本伝道論』教文館、一九九五年、五九頁。
- (15) 近藤、前掲書、二三〇頁。
- (16) 同書、二四九頁。
- (17) 同書、二三〇頁。
- (18) 学校伝道研究会編『キリスト教学校の形成とチャレンジ——教育の神学第三集』聖学院大学出版会、二〇〇六年、二二頁。
- (19) Horace Bushnell, *Christian Nurture* (New York: Charles Scribner, 1861; reprint, New Haven: Yale University Press, 1967), 4; 森田美千代訳『キリスト教養育』教文館、二〇〇九年、一三頁。
- (20) *Ibid.*, 34; 同訳書、四九頁。
- (21) *Ibid.*, 35; 同訳書、五〇頁。
- (22) *Ibid.*, 30; 同訳書、四五頁。
- (23) マタイによる福音書第十九章一四節、マルコによる福音書第一〇章一四節、ルカによる福音書第一八章一六節を参照。
- (24) 田中かおる「礼拝共同体」『教会学校教案』一月号、日本基督教団福音主義教会連合、二〇〇九年、一頁。
- (25) Bushnell, *Christian Nurture*, 350; 同訳書、四〇八頁。
- (26) *Ibid.*, 350; 同訳書、四〇八頁。
- (27) *Ibid.*, 165-66; 同訳書、一九九―二〇〇頁。

- (28) Ibid., 172-75; 同訳書、二〇七—二一〇頁。
- (29) 近藤、前掲書、七一頁。
- (30) 古屋、『日本伝道論』、九〇頁。
- (31) 同書、九一頁。
- (32) Bushnell, *Christian Nurture*, 335-36, 340; 同訳書、三九二—三九三頁、三九八頁。
- (33) アメリカの学問的な友人との対話からも、そのことを感じている。アメリカにおいては、キリスト教教育は、まず教会と家庭においておこなわれるべきものであると考えられており、キリスト教学校に対する期待は、教会と家庭に対してほとんどたれてこなかったし、現在ももたれていないように思われる。この点が、アメリカと日本において違いがあるように思われる。
- (34) 斉藤正彦「日本における教会とキリスト教学校の関係」『教育の神学』学校伝道会編、ヨルダン社、一九八七年、二五五—二五六頁。文意を損なつてはいないが、一部語句を筆者が変えた所があることを、ことわっておきたい。
- (35) 斉藤、同論文、二六一頁。
- (36) 斉藤正彦「教会と学校の宣教協力の現状と課題」『教育の神学』学校伝道会編、ヨルダン社、一九八七年、八九頁。
- (37) 近藤、前掲書、二五〇—二五一頁。
- (38) 同書、二四〇頁。
- (39) 同書、二四〇—二四一頁。
- (40) IIの第一点を参照。
- (41) 近藤、前掲書、二四一頁。